

# 生活科における「まちたんけん」

—— 子どもの遊びと住環境教育の視点からの考察 ——

## A Study on Local Studies in the Subject of “Living Environmental Studies”

—— From the Viewpoint of Children’s Play  
and Living Environmental Education ——

中 西 眞 弓  
東 内 則 子

キーワード：生活科、まちたんけん、子どもの遊び、住環境教育、教材研究

### 要 旨

直接体験を重視する生活科において、身近な人々や社会及び自然とのかかわりの中でそれらを一体的に取り扱うことのできる町探検は主要な単元である。子どもの生活は近年大きく変化し、友達と外で遊ぶ子どもよりも、家族と家の中で過ごす子どもが増え、公園も子どもの遊び場ではなくなりつつあるという。しかし、子どもが外で友達と元気に遊ぶことは子どもの発達にとって非常に重要な欠かせない行為である。また、町には様々な住まいがあり、住まいとそこでの生活が多くの人に支えられて暮らしているということを学ぶ機会は多くはない。生活科ではぜひそう言った子どもの遊びや住環境教育の視点も持ちながら、町探検を実施してほしいと考える。町探検が、多くの教科書にみるように「町のすてき」を求める漠然としたものではなく、いくつかのテーマを持ちながら行うことを提案したい。

平成29年（2017）年の指導要領改訂は、「予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付ける」<sup>1</sup> ことを目標にすえ、これまで重視してきた「生きる力」をより一層具体化するために、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で再整理したものとされている。生活科においても三つの柱を具体的に目標に明示<sup>2</sup>することにより、自分自身、身近な人々、社会および自然とのかかわりの中で、目指すべき方向性が示されることとなった。この中でも非常に重要となるのが、「身近な人々や社会及び自然とのかかわり」であり、自らの暮らす地域とのつながりを重視し、その中で自分の生活を支えている人々の存在を理解し、人とかかわりの大切さや地域の一員として自分の行動や役割を考え、安全で適切な行動をしていけるようになることが求められているとともに、

表1 小学校学習指導要領比較対照表【生活】

改訂（平成29年告示）	現行（平成20年告示・道徳改訂反映後）
第5節 生活	第5節 生活
第1 目標 具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。 (1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。 (2) 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。 (3) 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。	第1 目標 具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。

文部科学省 小学校学習指導要領（平成29年3月31日告示）比較対照表より

自然と触れ合うことで、自然の持つ素晴らしさや奥深さによる様々なことに興味を持ち、自分で調べたり学んだりしようとする意欲を高めることも期待されている。そして、こうした内容の取扱いについては、できるだけ地域の人々、社会及び自然を生かすとともに、それらを一体的に扱うよう学習内容を工夫するようにとされてきた<sup>3</sup>。生活科が「地域に根差し、児童の生活に根ざす教科である」こと、「生活科学習の対象や場は、児童の生活圏にある人、社会、自然である」が、その社会、地域、自然が近年大きく変化し、児童が地域の人々と触れ合う機会が減少していることから、地域の人々、社会及び自然を一体的に扱う学習活動を工夫することが求められているとしている。そしてその代表的な学習活動として町探検を挙げている。

本論では、生活科の主要な単元の一つである町探検について、近年の子どもの生活の変化や社会変化を踏まえ、子どもの遊びや住環境教育の視点からその指導方法や指導内容について考察を試みることにする。

1. 記憶に残る単元「まちたんけん」

町探検はさまざまな内容を学ぶことができるとともに、子どもにとって非常に楽しみをもたらすものであり、記憶に残る授業であると考えられる。現在18歳～20歳の短期大学学生に小学校時に学んだ内容をアンケート<sup>4</sup>したところ、図1のように町探検が最も多く、8割以上の学生が学んだ記憶を有していた。生活科の中で学ぶだけでなく、3年生以上になっても社会科で学ぶことが多いとはいえ、他の内容についても理科や社会、図工などで学ぶことは多く、児童にとって、探検のもつ魅

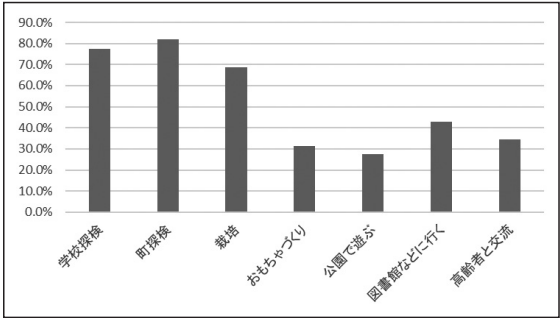


図1 小学校で学んだもの

力が非常に大きいことがうかがえる。なお、「公園で遊ぶ」「図書館など公共の施設に行く」「高齢者と交流する」についても、町探検と関連付けて学ぶことができる内容ではあるものの、教科書では明確に分割されているためか、記憶に残っている学生は半数に満たなかった。

生活科の指導計画では、一般に1年生では春夏秋冬の季節を見つけたり、季節を楽しんだりする内容が盛り込まれ、その一環として校外に出ることもある。校外学習と合わせて学習する場合や、また学外に出ず、校内で季節を探すこともあろう。町探検という言葉を使うかどうかも学校により異なる。1年生で学習すべき重要な内容の一つに、通学路における危険箇所を知り、安全を守っている人に気付くことを目的とした「安全な登下校」があるが、教科書だけでなく、実際に自分たちの町の中の危険を調べるために、町探検を行っている学校も存在する。1年生の生活科と3年生の社会科を合わせて、学校周りや地域を探検し、通学路にある危険を知らせる記号や危ない場所を確認したり、地域の駅・保育所・郵便局・公民館などの公共施設の場所を確かめたりしたことが学校公式サイトに発信<sup>5</sup>されている。人数が少なく、教員が2つの学年の児童を安全に引率できることが条件ではあるものの、上級生が1年生のために意欲的に交通ルールを教えている様子は想像に難くない。

2年生になると、生活科の中で町探検は主要な学習単位である。春と秋の2度の町探検が計画されている教科書が多いが、内容には少し差があり、大日本図書の教科書のように1度目の町探検では春を探しに行き、2度目の町探検で「すてき」を見つけるといように目的を変えているものと、学校図書や啓林館、教育出版のように町の中の「すてき」を知り、それを深める形をとっているものがある。日本文教出版や光村図書、信州教育出版社のように、せいかつ下巻の1単元にまとめられているものもある。地域の実情や児童数、教員数など様々な条件のもと、町探検が実施されていると思われる。

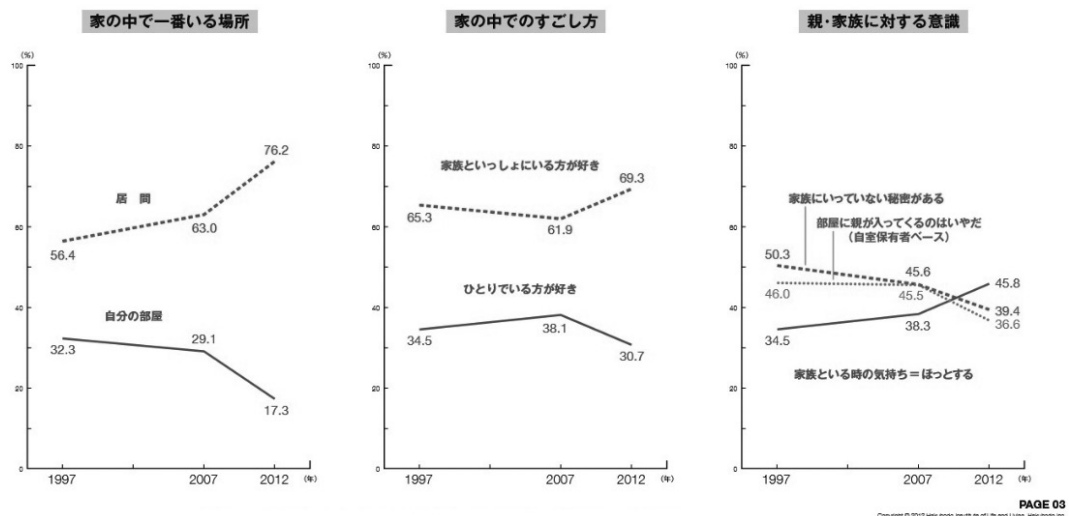


図2 子どもの生活15年変化 家族との関係 その1

生活総研報告書より

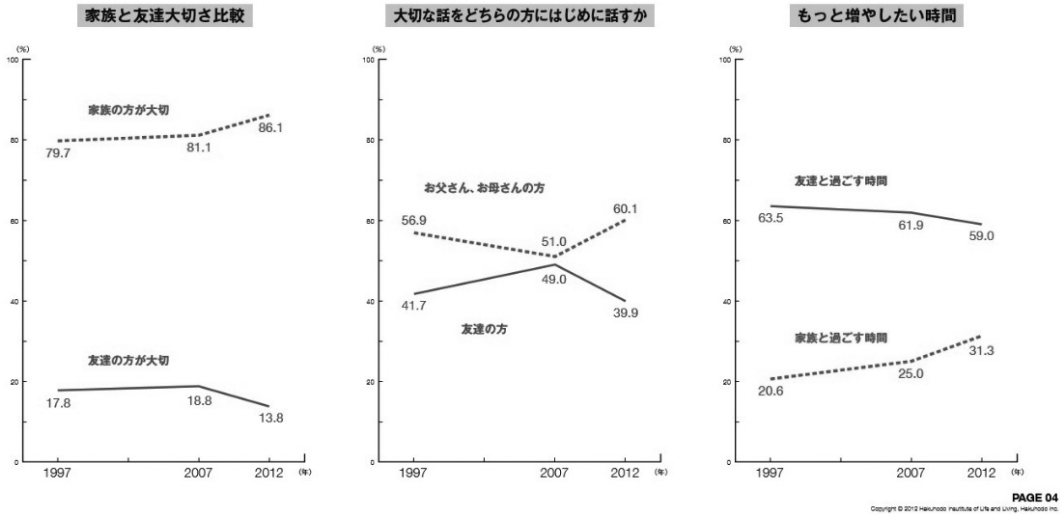


図3 子どもの生活15年変化 家族との関係 その2

生活総研報告書より

## 2. 子どもの生活の変化

生活総研が行った子どもの生活の変化調査では、小学校4年生から中学校2年生までの調査ではあるが、1997年からの15年間を比較し、図2、図3のような変化が見られたことを明らかにしている<sup>6</sup>。友達と過ごすよりも家族と過ごす時間を増やしたいと思っており、友達以上に家族を大切にしようとする傾向がみられること、さらに、家の中でもリビングで過ごすことが多く、自分の部屋より圧倒的に長い時間をリビングで過ごすことが分かった。図2と図3は小学校4年生以上の調査ではあるものの、同様の傾向は保育園、幼稚園児を対象とし、1995年から20年の経年変化を調べた図4ではより顕著な結果がみられる<sup>7,8</sup>。幼児が保育園や幼稚園以外で一緒に遊ぶのは、1995年には母親よりも友達と遊ぶことが多かったが、徐々に

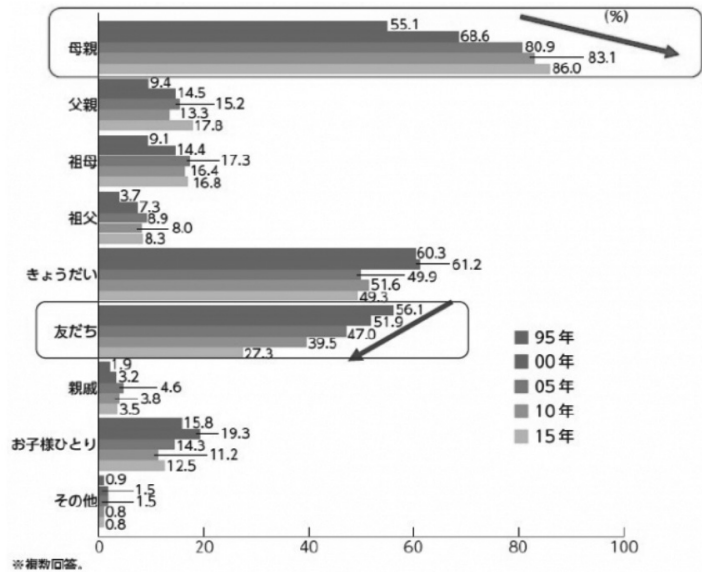


図4 平日、(幼稚園・保育園以外で)一緒に遊ぶ人(経年比較)

母親と遊ぶことが多くなり、2015年には母親と遊ぶ幼児は86%に達している一方、友達と遊ぶ幼児は27.3%に減少している。兄弟数の減少とともに、兄弟で遊ぶ子どもも半数を下回っており、幼稚園や保育園以外で子どもが外で元気に遊ぶことは急速に減少していることがうかがえる。こうした中、子どもの生活体験の不足を危惧する声もある。目白大学大学院教授の谷田貝氏は、人間が成長する上での直接体験の重要性とともに、それが

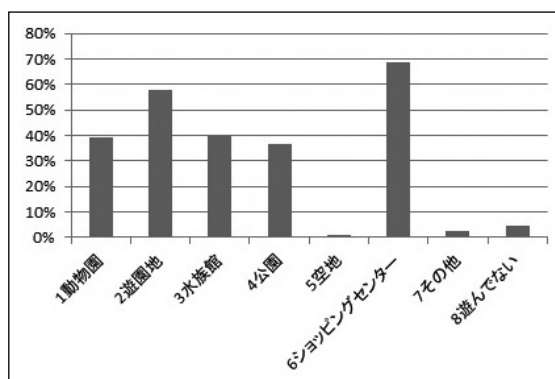


図5 小学校のころ家族に連れて行ってもらった遊び場

生活習慣の変化に伴い減少していることを危惧し、「現代の子どもたちを見ると、直接体験がほとんどなくなり、生活の大部分を間接体験が占めるという状況に陥っています。私はそれが問題だと思います。このことには国も気がついていて、平成元年の学習指導要領改訂のときに、子どもにもっと多くの生活体験（＝直接体験）をさせることを意図して、小学校の低学年に生活科を設けたのです。生活科で学習することのほとんどは、以前は家庭や地域の生活で体験できたことばかりです。」<sup>9</sup> と述べている。しかしながら、平成元年以降一層顕著に子どもの生活は変化を続け、子どもたちが家族の中といくつかの習い事の閉じた社会とTVやゲームをはじめとしたヴァーチャルな世界にいる時間が増大している。友達よりも家族と遊ぶことが多くなる中、遊びに行く場所にも変化がみられる。前述した短期大学学生の調査では、小学校時に家族が連れて行ってくれた遊び場はショッピングセンターが最も多かった。遊び相手が友達ではなく大人である場合、子どもの遊び場も大人にとって都合の良いショッピングモールなどになる傾向があるのではないだろうか。またこのことは、近年公園が子どもの遊び場になっていないということとも関係が深い。文部科学省は子どもの体力が低下している原因に、外遊びの重要性に対する理解の低下や子どもの外遊びに必要な時間と空間と仲間の減少を挙げている<sup>10</sup>が、外遊びの重要性に対する理解不足は親だけではなく、社会全体の問題となっていると考えられる。公園が遊び場として機能しなくなったのも、そうした社会全体の理解の低下が大きな原因となっているのではないだろうか。大声禁止、遊具撤去、ボール遊び禁止など、子どもが遊ぶことができないように禁止づくめの公園が増えている<sup>11</sup>という。そして、こうした禁止づくめの背景には、「ちょっとしたことにもクレームをつける人がいて管理者はそれを怖れる時代」であることや、「問題が起こりそうなことは、すべて禁止にしまった方が無難だ」という心理が働くのではないかと考えられる<sup>12</sup>。つまり、子どもが地域の子どもではなくなってしまっている状況がうかがえる。保育所が迷惑施設ととらえられ、子どもが大声で遊ぶことさえできなくなっていくことは、健全な子どもの育成に大きな障害をもたらすものではないだろうか。



### 3. 地域コミュニティの衰退と住環境教育の必要性

少子高齢社会の中で、地域コミュニティの役割が再認識されるようになり、その希薄化が問題視されることが多くなった。地域コミュニティは「一定の範囲で地理的に広がり若しくは関連があり、設立趣旨及び目的、経済活動、生活慣習等の面で共通の利害を有し、構成員である個人との間で相互に影響を与え合う集団や組織のこと」と定義<sup>13</sup>されるが、それが希薄化あるいは消滅しつつある状況にあるという指摘は多い。2008年にはコミュニティ基本法の草案が自民党から提出され、第二次コミュニティブームとも言われるほどコミュニティ再生の注目度は高かった。しかし現在もコミュニティの再生は道遠く、高齢者が住み慣れた町でできる限り住み続けられるようにとの地域包括ケアの実現に向けて、またコミュニティの再生が重要な問題として浮上してきている。

こうした中、「日本では大人ですら自分の家の修理やまちづくりへの参加は少なく、その楽しさや大切さを子どもに伝え、継承していくことの重要性を認識している人は少ない」<sup>14</sup> という指摘もある。さらに日本では、子どもが住教育を学ぶ機会がなく、コミュニティの大切さを学ぶ機会も非常に限られている。子どものころから地域生活の大切さを感じ、それを正しい知識とともに理解することは非常に重要ではないだろうか<sup>15</sup>。「住む」ということは自分だけでは成り立たず、家族をはじめとした多様な世代・価値観の人たちと交流しながら互いに学びあうことができ、人間関係を築くためのコミュニケーション力を高めることにつながる<sup>16</sup>と考えられる。住まいは私有財産でありながら、その存在が居住地をはじめとした多くの人に影響を与え、それゆえ公共財とも呼ばれることはよく知られている。「住む」ことは、単に住宅という箱に暮らすということではない。居住地の一員として、コミュニティの担い手として生活することを含んでいる。家族・居住地の自然や働く人とのかかわりを含め、図5に示す住教育の4つの領域は、生活科で学ぶ内容と極めて親和性が高いと考えられるのではないだろうか。



図6 住教育 4つの領域

住総研 HP [http://www.jusoken.or.jp/test\\_html/diffuse/index.html](http://www.jusoken.or.jp/test_html/diffuse/index.html)

#### 4. 生活科で学ぶこと

生活科で学ぶ1年生と2年生の共通の目標としては次の3つが示されている。(1)「学校、家庭及び地域の生活にかかわることを通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりについて考えることができ、それらのよさやすばらしさ、自分とのかかわりに気付き、地域に愛着をもち自然を大切にしたり、集団や社会の一員として安全で適切な行動をしたりするようにする」、(2)「身近な人々、社会及び自然と触れ合ったりかかわったりすることを通して、それらを工夫したり楽しんだりすることができ、活動のよさや大切さに気付き、自分たちの遊びや生活をよりよくするようにする」、(3)「自分自身を見つめることを通して、自分の生活や成長、身近な人々の支えについて考えることができ、自分の良さや可能性に気付き、意欲と自信をもって生活するようにする」というものである。(1)では、「学校や家庭、地域などの児童の生活圏は、

表2 小学校学習指導要領比較対照表 生活科内容部分

2 内 容	2 内 容
<p>1 の資質・能力を育成するため、次の内容を指導する。</p> <p>〔学校、家庭及び地域の生活に関する内容〕</p> <p>(1) 学校生活に関わる活動を通して、学校の施設の様子や学校生活を支えている人々や友達、通学路の様子やその安全を守っている人々などについて考えることができ、学校での生活は様々な人や施設と関わっていることが分かり、楽しく安心して遊びや生活をしたり、安全な登下校をしたりしようとする。</p> <p>(2) 家庭生活に関わる活動を通して、家庭における家族のことや自分で行えることなどについて考えることができ、家庭での生活は互いに支え合っていることが分かり、自分の役割を積極的に果たしたり、規則正しく健康に気を付けて生活したりしようとする。</p> <p>(3) 地域に関わる活動を通して、地域の場所やそこで生活したり働いたりしている人々について考えることができ、自分たちの生活は様々な人や場所と関わっていることが分かり、それらに親しみや愛着をもち、適切に接したり安全に生活したりしようとする。</p> <p>〔身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容〕</p> <p>(4) 公共物や公共施設を利用する活動を通して、それらのよさを感じたり働きを捉えたりすることができ、身の回りにはみんなが使うものがあることやそれらを支えている人々がいることなどが分かるとともに、それらを大切に、安全に気を付けて正しく利用しようとする。</p> <p>(5) 身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わったりするなどの活動を通して、それらの違いや特徴を見付けることができ、自然の様子や四季の変化、季節によって生活の様子が変わることに関付くとともに、それらを取り入れ、自分の生活を楽しもうとする。</p> <p>(6) 身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくることができ、その面白さや自然の不思議さに気付くとともに、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。</p> <p>(7) 動物を飼ったり植物を育てたりする活動を通して、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかけることができ、それらは生命をもっていることや成長していることに気付くとともに、生き物への親しみをもち、大切にしようとする。</p> <p>(8) 自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を通して、相手のことを想像したり伝えたいことや伝え方を選んだりすることができ、身近な人々と関わることのよさや楽しさが分かるとともに、進んで触れ合い交流しようとする。</p> <p>〔自分自身の生活や成長に関する内容〕</p> <p>(9) 自分自身の生活や成長を振り返る活動を通して、自分のことや支えてくれた人々について考えることができ、自分が大きくなったこと、自分で行えるようになったこと、役割が増えたことなどが分かるとともに、これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをもち、これからの成長への願いをもって、意欲的に生活しようとする。</p>	<p>(1) 学校の施設の様子及び先生など学校生活を支えている人々や友達のことが分かり、楽しく安心して遊びや生活ができるようにするとともに、通学路の様子やその安全を守っている人々などに関心をもち、安全な登下校ができるようにする。</p> <p>(2) 家庭生活を支えている家族のことや自分で行えることなどについて考え、自分の役割を積極的に果たするとともに、規則正しく健康に気を付けて生活することができるようにする。</p> <p>(3) 自分たちの生活は地域で生活したり働いたりしている人々や様々な場所とかかわっていることが分かり、それらに親しみや愛着をもち、人々と適切に接することや安全に生活することができるようにする。</p> <p>(4) 公共物や公共施設を利用し、身の回りにはみんなが使うものがあることやそれを支えている人々がいることなどが分かり、それらを大切に、安全に気を付けて正しく利用することができるようにする。</p> <p>(5) 身近な自然を観察したり、季節や地域の行事にかかわる活動を行ったりなどして、四季の変化や季節によって生活の様子が変わることに関付き、自分たちの生活を工夫したり楽しんだりできるようにする。</p> <p>(6) 身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりなどして、遊びや遊びに使う物を工夫してつくり、その面白さや自然の不思議さに気付く、みんなと遊びを楽しむことができるようにする。</p> <p>(7) 動物を飼ったり植物を育てたりして、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもち、また、それらは生命をもっていることや成長していることに気付く、生き物への親しみをもち、大切にすることができるようにする。</p> <p>(8) 自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を行い、身近な人々とかわることの楽しさが分かり、進んで交流することができるようにする。</p> <p>(9) 自分自身の成長を振り返り、多くの人々の支えにより自分が大きくなったこと、自分で行えるようになったこと、役割が増えたことなどが分かり、これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをもつとともに、これからの成長への願いをもって、意欲的に生活することができるようにする。</p>

文部科学省 小学校学習指導要領（平成29年3月31日公示）比較対照表より

自分が生活する場であるとともに、友人や先生、家族や地域の人々と共に生活する場でもある。学校、家庭及び地域の生活に関わることを通してとは、それらの場所に出掛け、諸感覚を働かせながら見たり聞いたりするなどして関わり、それらの場所やそこに暮らす人々に直接働きかけること<sup>17</sup> が大切であるとし、児童が直接働きかけて関心をもってかかわる体験をして、それについて考察することによって、自分とのかかわりや社会・自然の素晴らしさに気付いたり発見したりすることができるというものである。(2)でも「児童の身の回りにあって、児童自身と関係の深い人々や社会及び自然に親しくかかわり、それらを直接的、間接的に感じ取る具体的な活動を行うことが大切<sup>18</sup>」としており、いずれも学校内で学ぶだけでなく、町に出て学ぶ内容を含んでいるものと考えられる。そしてそうした体験を行ったうえで、(3)の目標を達成することにつながっていくのではないだろうか。具体的な生活科の内容については表2のように9つにまとめられているが、この中でも多くの項目で町探検と関係の深い内容が含まれている。(1) 通学路の様子やその安全を守っている人々などについて考える、(3) 地域の場所やそこで働いている人々について考えることができる、(4) 公共物や公共施設を利用する活動を通してそれらの良さを感じたり働きを捉えたりすることができ、(5) 身近な自然を観察したり、季節や地域の行事にかかわったりするなどの活動を通して、(6) 身近な自然を利用したり、身近にあるものを使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、(8) 自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝えあう活動を通して、などは、すべて町探検と関連付けて指導することが可能な内容であると考えられる。

## 5. 町探検の実践例

生活科の学習指導要領の内容の取扱いについては、社会が急速に変化し地域の様子が大きく変わる中、児童が地域の人々、社会及び自然と直接かかわることが少なくなっているのも、それらと直接かかわる学習活動をこれまで以上に重視すべきということとともに、地域の人々、社会及び自然を一体的に扱う学習活動を工夫することが求められている。その理由としては、「児童が直接関わる対象や場は、人、社会、自然が一体となって存在しているからである。また、低学年の児童の発達の特性を踏まえると、人、社会、自然を一体的に感じ取り、自分との関わりで捉えることが重要だからである。低学年の児童は、人、社会、自然を客観的に区別しながら認識するのではなく、つながりのあるものとして、それらを丸ごと捉えていく傾向が強く、そうした児童の発達の特性を生かした学習活動を行うことを忘れてはいけない<sup>19</sup>」としている。このため、どの教科書でも町探検の内容は「レッツゴーまちたんけん」や「まちのすてきはっけん」など、自然の良さを見つけてもよいし、働く人に興味を持ってもよいという扱いになっている。しかし、児童が人、社会、自然を一体的に感じ取るからと言って、テーマを漠然としたものだけにする必要はない。テーマはある程度方向性を与えたとしても、児童は人、社会、自然を一体的にとらえることができる。以下はテーマとして考えられる事例である。



#### (1) 通学路の安全と安全を守ってくれる人

生活科では基本は地域の自然や社会や人々の「よさ」に気付くことを目標とすることが多いが、安全に生活できることも目標の一つとなっている。このため、通学路の安全を守ってくれる人については「よさ」を学ぶが、安全に生活するために気付かなければならないこともたくさんある。自分たちで気付くだけでなく、事前に保護者にハザードマップ情報をアンケートするなどして把握し、教員が確認することが求められる。警察官や駅員から話を聞くのもよいと思われる。上級生の社会科町探検と合同で実施している例もよい案と思われる。

#### (2) 町の遊び場と遊び方発見

公園が遊び場として機能していない状況があると言われるが、子どもたちがどこでどんな遊びをしているのか、また、どんな遊びができそうかを考えてみる。普段は遊んでいなくても、危険のない場所であれば、様々な場所が遊び場になる。自然や生き物を探す遊びや、道具を使わない遊びもできる。親や地域の高齢者に昔はどんな遊びをしていたのかをインタビューするのもよい。

#### (3) どんな家があるかな

町にはいろいろな住宅があり、いろいろな暮らしをしている。興味をもった住まいを見つけ、どこがいいと思うかを発表する。「バーバパパのいえさがし」<sup>20</sup>などを参考に、住まいは大きさや美しさだけでなく、周りの人や便利さともかかわっていることを学ぶ。同様に、庭のきれいな住まいを見つけるのもよい。庭はその家の人のためだけでなく、周りの人にとってもきれいであることが望ましい。他人の家ではあるが、自分たちの町を美しくしているものでもある。

#### (4) 高齢者の暮らし

高齢者の一人暮らしが増えている。高齢者がどこにどんな風に暮らしているのか、元気になっているのか、困っていないかを訪ねてみる。どこに高齢者が暮らしているのかを調べ、教員が事前に訪問の適否を考慮しておく必要がある。

#### (5) 町のやさしさ発見

音やにおい、点字ブロック、歩道の切り下げ、いろいろなところに誰かのためになることがある。町の中のやさしさを発見し、どんな人のためになるのか考えてみる。

#### (6) 町のすてき発見&働く人へのインタビュー（教科書掲載内容）

町の中で働く人がどんな仕事をしているのか、自分たちの暮らしをどんなふうに支えてくれているのかを知り、またどんなことに頑張っているのかなど、興味を持ったことをインタビューして、町の「すてき」を報告する。

## 6. 町探検の実施について

町探検を実施する際には、あらかじめ行う準備がたくさんある。児童に交通安全ルールや人と会う時のあいさつなどの基本的なルールやマナーを指導することは、町探検に限らず重要ではあるが、それを再確認しておくこともその一つである。また探検を行うまでに、保護者やPTAと連携を取り、事前の情報や協力体制を整えることが多いが、サポートの仕方については、事前に目的と、してほしいことを明確に伝え、保護者やPTAに子どもの安全を丸投げする形にならないように気をつけなければならない。保育園や幼稚園以外に児童が外で友達と遊ばなくなっているとはいえ、学校には児童だけで登校し、児童は徐々に自立していかなければならない。リスク回避からか保護者が町探検引率者として駆り出されることが多くなっている<sup>21</sup>が、児童の安全を保護者に一任することには無理があり、保護者の協力もグループの行動を丸ごと引率させるのではなく、危険と思われる場所での見守りにとどめるなど再考が必要と思われる。児童だけで行動する際には、安全を確保するために隠れたサポートをPTAや地域の人に望まれるものの、引率者としての役割は教員のみが担当すべきではないだろうか。少人数の探検隊を作る際でも、ほかのクラス担任と協力し合いクラスを解体したり、出発時間帯をやりくりしたりすることで、教員がすべての班を引率することも可能である。また教員が事前に町を実際に歩き、児童の目線で町を再確認しておくことも不可欠だと考える。

幼稚園、保育園以外では外で友達と遊ぶことが激減し、大人と一緒に遊ぶ習慣がついている児童たちであるが、児童だけで町を探検することの楽しさと冒険を経て、自立していけるように配慮することも大切な視点であろう。またこれをきっかけに友達と外で遊びたいと感じるようになることも大切である。さらに、子どもたちが地域にとって大切な存在であることを地域の人にも知ってもらい、子どもを地域の中でともに育てていく必要性を感じてもらえるよう、地域の人たちへの配慮も十分になされる必要があろう。

町探検は、実際の体験を大切にするといううえでも、自分、身近な人々、地域、社会を一体的に取り扱うという意味でも、生活科の主要な単元と考えられる。またその内容は大変広く、様々な可能性を持っている。実施に当たって、教員の負担はかなりあるものの、児童の得るものも大きい。町探検がさらに充実した内容として取り上げられるとよいと思う。

### 註

- 1 「小学校指導要領解説 生活編」平成29年6月 文部科学省  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1387017\\_6\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1387017_6_1.pdf)
- 2 「小学校学習指導要領 (平成29年3月31日) 比較対象表 文部科学省  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/05/30/1384661\\_4\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/05/30/1384661_4_1_1.pdf)
- 3 「2 内容の取扱いについての配慮事項」文部科学省「小学校学習指導要領解説 生活編」平成20年8月 日本文教出版 P47
- 4 平成29年6月～7月に神戸山手短期大学にて実施。有効票128票 直接配票直接回収、有効回収率

98.5%であった。

- 5 愛媛県大洲市立白滝小学校学校公式サイト 2017年4月18日の記録  
<http://shirataki-e.esnet.ed.jp/modules/wordpress0/index.php?p=2875>
- 6 「1997年→2007年→2012年『子供の生活15年変化』調査レポート 2000年前後に生まれた『アラウンド・ゼロ世代』を追う」 生活総研  
<http://www.hakuhodo.co.jp/uploads/2012/09/20120914.pdf>
- 7 「お友だちと園外で遊ぶ子どもが20年で半減!? その背景とは」 三輪ひかり  
<https://conobie.jp/article/4456>
- 8 「第5回 幼児の生活アンケート」ベネッセ教育総合研究所 2016  
[http://berd.benesse.jp/up\\_images/research/YOJI\\_all\\_PO1\\_65.pdf](http://berd.benesse.jp/up_images/research/YOJI_all_PO1_65.pdf)
- 9 「子供の生活習慣の変化と生活体験の不足」谷田貝公昭 ベネッセ教育総合研究所 2010年「子どもの教育を考える」特集第5弾 子どもを取り巻く環境と生活習慣  
[http://berd.benesse.jp/berd/berd2010/feature/feature05/yatagai\\_01.html](http://berd.benesse.jp/berd/berd2010/feature/feature05/yatagai_01.html)
- 10 「子どもの体力の低下の原因」文部科学省「子どもの体力向上のための総合的な方策について（答申案）」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/1344534.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/1344534.htm)
- 11 「公園でサッカーしたら警察に通報？大声も禁止、何もできない公園増で遊ぶ場が壊滅の危機」平沼健 2015.03.24 ジャーナリズム Business Journal  
[http://biz-journal.jp/2015/03/post\\_9346.html](http://biz-journal.jp/2015/03/post_9346.html)
- 12 「公園でのキャッチボールやサッカーは禁止へ 子どもが遊びからスポーツの楽しさを知る機会が減少」相沢光一 ダイヤモンドオンライン  
<http://diamond.jp/articles/-/56357?page=2>
- 13 「少子高齢社会におけるコミュニティの役割 ～地域コミュニティの再生～」山内一宏 立法と調査 2009.1 No.288  
[http://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rippou\\_chousa/backnumber/2009pdf/20090113189.pdf](http://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rippou_chousa/backnumber/2009pdf/20090113189.pdf)
- 14 「住まい・まちづくりの資質・実践力を育てる」小澤紀美子 Housing Finance 2014 Spring  
<http://jh.f.go.jp/files/300181898.pdf>
- 15 「高齢社会における地域コミュニティについての一考察」中西眞弓 2016年12月20日 神戸山手短期大学紀要第59号 p39-p50
- 16 「住教育とは」住まい・まち学習（住教育）住総研 HP  
[http://www.jusoken.or.jp/test\\_html/diffuse/index.html](http://www.jusoken.or.jp/test_html/diffuse/index.html)
- 17 「小学校指導要領解説 生活編」2017年6月 文部科学省  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1387017\\_6\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1387017_6_1.pdf)
- 18 前掲17
- 19 前掲17
- 20 「パーパパのいえさがし」アネット＝チゾン／タラス＝ティラーさく やましたはるおやく 講談社
- 21 「小学校の課外授業、町探検についていきました」ミジンコブログ  
<http://tarako3016.hatenablog.com/entry/20101021/1287668936>  
「町たんけんに行ってきました」小2ムスメのお勉強ブログ  
<http://musumenoobenkyou.seesaa.net/article/398216897.html>  
他ネット上には多数の保護者ボランティア体験が掲載されている。しかし、無計画で責任を押し付けることに疑問の声も多い。